

海軍

追想 第五十五号海防艦

— 亡き戦友に捧げる —

長崎県 一瀬 千萬太

「海五十五号（第五十五号海防艦）」に着任したのは昭和十九年（一九四四）十一月だったと思う。この時はまだ艦装中で、日本鋼管鶴見造船所内の木造二階建ての宿舎で隊を編成していた。建物の玄関を一步入った所に、衛兵詰所があった。軍艦での舷門衛兵は厳格なのが普通であったが、ここでは一同気軽に出入りしていた。陸上であったことと、艦装作業が忙しくなってきた、頻繁な出入りが必要だったためでもあつ

たろう。日課は早朝の体操、ランニングに始まり、あとは艦内生活に準じたものであったが艦装中は概して気楽であった。

艦装中で思い出されたことは、同一敷地内に二、三の僚艦が同様に隊を組んでいた。隣合っていたので時としては部隊間で、ちょっとしたトラブルがあったこともあった。また、夕食後の時間は自由時間同様であった。ある日この時間に、若い水兵数人が廊下を走り回ったり、士官室の書箱に上がったりしたことがあった。とがめると「隠れん坊しています」との返事、あまりの無邪気さに叱る気が起こらなかったと話した人もあった。

十一月の末か十二月に入った頃からだったろうか、空襲警報が鳴るようになった。ほとんどが夜中だつ

た。日が経つにつれ回数も増え、また寒気もつってきた。警報の都度、寝入りばなの温かい寝床から防空壕に退避することは、しかも霜の夜二度も壕に入ることもあったが、辛いことだった。睡眠不足により、翌日は多かれ少なかれ影響があったようだった。

艦の完成が近づくと、いろんなテストが行われた。張水テストもその一つだった。テストの結果は水がにじんできたそうである。艦長が苦情を言うと、さびが出るよと水は止まるとの造船所側の説明だったそうである。艦長が入手した情報では、「海五十五」は鋳打ち競争に使われたそうで、従って鋳打ちは粗雑であったろう。艦長は納得せず締め直しを要求した。二度では直らず再度要求したそうである。このため「海五十五」の鋳頭は平べったくつぶされていた。

試運転に同乗したことがあった。コンパスの修正が行われたが完全な修正は出来ず、かなりの自差が残った。また艦橋には左舷と右舷にそれぞれ二十センチの大型双眼鏡が備え付けられていたが、試運転運航の際

これで見ると、動画がパツパツと動くような状態で到底使い物にはならない。尋ねてみると、タービン艦ではこれでよかったと言っていた。ゴムを敷いて震動を吸収したようであった。

公式記録では、引き渡しは十二月二十日となっているようであるが、佐伯へ向けての処女航海がこの日ではなかったろうか。午前中は東京湾内で各科の訓練航が行われた。時折、陽が射したり、雪が舞ったりの寒い日であった。房総半島の鋸山を左手に、城ヶ島を見下ろすようにして近くを通り過ぎ、外洋に出たのは昼過ぎであったろう。湾内ではさほど感じなかった波も外海ではしけていた。艦首は右に左に大きく振れ、若い操舵員は立て直しに必死であったがなかなか安定させることが出来なかった。伊豆半島を過ぎ、駿河湾に入る頃、ようやく天気は穏やかになった。第一日目の碇泊は清水港であった。夕日に映えた三保の松原が美しかったことが思い出される。

二日目の碇泊は尾鷲だったと思う。尾鷲は一週間くらい前に大地震にあっており、被害がひどく、街は

ひっそりとしていた。

翌日は明石海峡を通り瀬戸内海に入った。高松に立ち寄り、艦長外数人で金比羅宮にお参りして艦の安全を祈願したことを思い出す。「柄」にも碇泊した記録はあるが、この時かどうかははっきりしない。瀬戸内の難所、来島水道は朝の十時頃通ったような気がしているので、この近くのどこかでも碇泊したのだろうが記録にない。佐田岬を通ったのは最終日の二時頃ではなかったか。ちょうど潮の流れの最盛期で大きな渦が巻いていた。「航海保安配置につけ！」艦長の号令で錨を垂らし万一に備えた。大きな渦に乗った時は、舵むきが利かず、ぐるりと半回転したりした。このようなことが二回ぐらいあったのではなかったろうか。やがて渦の巻く所を夕刻に佐伯の訓練所に着いた。二十五日六日だったか、二十七日八日だったか、はっきりしない。

訓練所に着いたあと艦長は連絡のため司令部に行った。帰艦後「指導官は厳格で鬼中佐と言われる人だそうだ」と言った。これは困ったことだと重苦しい気分

になった。でも現に接してみるとそのようなことはなかった。訓練は、正月もそこに午前午後とみっちり行われた。佐伯湾で行われたこともあり、また水の子灯台付近へも度々出動した。時としては佐多岬近くまで行ったこともあったが回数は少なかった。訓練は各部に及んだことは当然であるが、特に力を入れていたのは艦長の対潜訓練ではなかったか。訓練海面で浮きを付けた海中の潜水艦を探知、追尾、攻撃の訓練が繰り返し繰り返し行われた。

艦長は目隠しされ海面の様子は分からず、また外の様子が全然分からぬ水測探信儀室からの報告をもとに潜水艦を追って操艦するので傍らにいて指導した。艦長は訓練の終わり頃には要領を会得し、「自信があるよ」と言っておられた。一カ月に佐伯での訓練は終わった。

いよいよ「海五十五」は任務に就くことになった。

シンガポールに行くとか、上海に行くとかの話聞いたこともあったが、状況の変化により、第一回の任務は台湾行き船団の護衛となった。下関沖の外海で船団

を結成したのではなかったか。船団は商船七隻、海防艦七隻からなっていた。矢野艦長が先任艦長であったので、指揮官の大佐、指揮官付准尉一人、下士官、兵二、三人が乗り込み、旗艦として先頭を進むこととなった。大佐は既に指揮官として台湾行きを経験を積んだ方であった。商船はほとんど戦艦船で速力は六ノットそこそこ。船名は、「第〇〇号播州丸」の船名が多かった。

出発は二月十日頃ではなかっただろうか。航路は沖縄列島沿いと、大陸沿岸沿いが検討されたようであったが、指揮官は、戦況と過去の経験とにより、大陸沿いを決定されたようだった。

朝出発した船団は対馬北端を左に眺めながら釜山近くまで進み、南岸の島々を縫うようにして西進、さらに島沿いに北進し、三八度線付近に達したのは何日も経ってからだったろう。途中どの辺りだったのか記憶はないが、コンパスの針が変な方向を指している所があった。夜目ではあったが、実際の島々の形と海図上の島とは一致していた。コンパスで方位を計り位置を

出すと前後の島の真ん中に出た。

進路を右へ右へと修正し、しばらく走ったあと再び位置を出してみた。結果は前と同じであったが、目で見た位置は遙か横に寄っている。起きている人は当直員だけで、他の人達は眠っている。相談も出来ず慌てもしたが、現実には安全に進んでいた。「我が航跡を進め」の信号を出していたので、後続の船団は変と思いついて来たのかもしれない。あとで調べてみると、海図に小さな文字で「磁乱あり」という説明書きがあった。おそらく鉄鉱石の島か、鉄鉱脈の個所があつて磁場を乱していたのであろう。

三十八度線付近に七発島という名の小さな島があつた。この島を最後に沿岸を離れ、山東半島に向け黄海を横断し突走ることになっていた。真夜中だったろう。当直将校にあつたので、指揮官、艦長に報告したあと変針した。今までは島伝いで敵潜水艦に襲われる可能性は少なかったが、大海に出ると危険度は一気に増加するので緊張感がみなぎった。

黄海は無事に通過し、大陸の沿岸沿いに南下して進んだ。ジャンクが見えだした時は思わず異国情緒を感じたものである。途中「青島」の光景が美しかったことが今でも印象に残っている。どの付近だったか定かでないが、日本のかなり大きな貨物船が岸近くで座礁しているのが見えた。十時頃ではなかったろうか。座礁して間もないと思えた。大型望遠鏡で覗くと甲板には積荷の自動車も見えた。他の積荷もたくさんあったのだらう。周りはジャンクが取り巻き、甲板には多数の人影が群がっていた。悔しくて大砲をぶち込みたい衝撃にかられた。帰りに見ると、船はあったが積荷はすっかり無くなっており、ジャンク一隻、人影一人も見えなかった。

航行中、舵が動かなくなったことがあった。当直将校は直ちに「我舵故障」の旗號を掲げ隊列を離れることにした。応急要員を泳がせ調べさせると丸太が艦底に引っ掛っていた。作業員を増し取り除く手筈をした。経験を積んだ人の機敏な処置には感心した。艦長は「その前に後進してみよう」と後進微速をちょっと

かけた。艦底で渦流が起きた。太く、長い丸太がぼっかりと舷側に浮き上がってきた。舵が作動した。艦底を点検したかどうかの記憶はないが直ちに隊列に復帰し、今まで通りの航行に戻った。昼間だったのは幸いであった。

厦門^{アモイ}付近まで南下し、台中付近を指して台湾海峡を横断した。かつて安全だった所も、この頃はこの航路で最も危険な個所とされていた。無事通過し海岸沿いに北上し、基隆に着いたのは夜の八時か九時頃であったらう。船団が無傷で目的地に着くことが出来たことは、運に恵まれたのと全員の努力の結果ではあるが、振り返ると必ずしも平穩な日ばかりではなかった。

まず第一に潜水艦の危険は常につきまとい、心の休まる時はなかった。速力が均一でない船の集まりであるため隊列は乱れがちであった。要所要所では「の字運動航法」が行われたので隊列が伸び、殿の方は確認し難いこともあった。指揮官はまとめるのに苦労した。はぐれると敵潜の餌食になりやすいからであ

る。

この航海は約二十日間ぐらゐであった。三月の初めというのに基隆では内地の五月頃のような陽気であった。この頃艦内では風が蔓延して、乗組員一同大変悩まされていた。防寒用に黒いセーターが支給されていたが、日当たりのよい場所での整備作業時や休憩時の日向ぼっこの折など、陽気にさそわれてセーターの表面に風が浮き出ていた。遠くから見ると黒いセーターが茶色に見えたのには驚いた。艦内での処置は出来ず、衣類を取りまとめ陸上に送り、蒸気消毒をしたのではなかったか。

一週間ぐらゐの滞在で内地へ帰ることになった。輸送船の船名は違っていたが、船種や隻数は似たようなもの、護衛艦はそのまま引き返した。ただ違っていたのは、内地に帰る陸軍のSB艇一隻が加わったことである。航法や通信に相通じぬ所があったので、最後尾をただついて来てもらうことで隊列に加わった。

帰りに来た時のコースの逆戻りに似ていたが、離岸

地点は基隆と台中の中間地点付近ではなかったろうか。この頃、台湾には敵機の偵察がよくあった。決まって朝十時頃で定期便と呼んでいた。この定期便の頃には遙か海上に出ていて捕まらぬようにと、夜中の三時頃出港したのではなかったか。かくして海峡を無事通過し大陸沿岸を北上したのである。帰りは行き方の行動の繰り返しで、特に脳裏に浮かぶものはない。ただ対馬付近を通ったのは夕暮時であった。この時「海五十五号」が潜水艦らしきものを探知した。

「緊急左一斉回頭」の信号弾を打ち上げ船団を回避させ攻撃に向かった。しばらく索敵し、爆雷攻撃を行った。その後効果の確認が行われた。海水を汲み上げた結果、浮き上がった油の確認は出来たが、浮遊物等の確認は出来ないまま切り上げた。暗くなったためと旗艦として船団をまとめなければならなかったためであったろう。

六連島付近で船団を解散し、指揮官は去られた。我々に対する対応は温厚で、軍人の中では稀にみる紳士的な方だったことを思い出している。

「海五十五号」はこのあと呉に向かった。呉に何日碇泊したかは記憶にないが、この碇泊中に呉は大空襲を受けた。よく晴れた日の二時か三時頃ではなかったろうか。大編隊が襲ってきた。湾内にはたくさんさんの艦船がいた。一斉に応戦の火蓋が切られ、上空は見渡す限り弾幕に覆われ何も見えなくなった。弾幕が薄れ青空が戻った。次の大編隊が襲ってきた。再び弾幕で空は見えなくなった。艦船を襲った敵機は「広」の飛行場方面へ飛んで行った。海五十五号より当然射撃した。我が艦には被害はなかった。上空に翼片がきらきらと舞っているのが見えた。頭上を直撃するのではないかと思えたが、少し離れた所に落ちた。落ちるまで空を見上げていたが、この時間の長かったこと。港内では方々で大きな被害を受けていたようであった。戦艦「日向」か「伊勢」かであったろう飛行甲板に直撃を受け、また巡洋艦「大淀」が傾きながらタグボートに引かれドックに向かっていたような気がする。

呉を出て向島の造船所へ修理に行ったのではなかったろうか。造船所ではドックの中での修理で、トイレ

は艦のは使用出来ず、かなり離れた所の仮設のトイレまで行き、いちいち用を足さねばならなかった。また、兵員の中に鳥目を患った人がいたが、夜、道板を渡って行くのに大変苦労していたのを思い出す。修理が終わる東シナ海へ向け航行した。途中、徳山の燃料廠に立ち寄り給油したことがあったが、この時ではなかったろうか。

哨海任務に就いた。東シナ海東北部の海域を哨海した。ここで思い出すことは、この付近の海が浅かったことと、数多くの船が沈められていたことであった。マストを出していたのもあれば、甲板が海面に出ているのもあった。夜航海の折、よくぞぶち当たらなかったものである。

区域をやや南の方に移し舟山列島を基地にして付近の哨戒に当たった。上海沖の海には機雷が敷設してあった。対潜用で深かったので通常の航行には支障なかったが、繫策が切れて浮遊機雷となって多数漂っていた。これは航行には大変危険であった。夜航海で一

晩中走り回っていた折、朝もやの中からひょっこり目の前に現れたり、また漂泊中舷そばまで流れてきたのもあった。

触角が外板に当たると爆発の危険がある。用心しながら棒で突き離しながら船の後部へ流したこともあった。浮遊機雷は当初丹念に処分していた。そのため三、四百メートル離れて機雷を撃つので弾も多数要ることだし、だんだんと適当な処分になった。当時は神経が麻痺していたのだろうかあまり気にしていなかったが、今になってよくぞ無事だったと思うのである。

「氷川丸」だったか、「聖川丸」だったかが、内地へ帰るためここを通ったことがある。一万トントラスの貨客船で唯一の生残り船だったようだ。いわば、当時の日本には虎の子だったため、命により僚艦一隻と共に青島沖まで護衛して行ったことがあった。海は波が高かった。「海五十五号」は右側に、僚艦は左側に付いて行ったのであるが、僚艦を見ると波間に見えたり隠れたりしてあえぎあえぎ進んでいるように見えた。我々の方はそのようには感じていなかったが、先

方から見るとやはり同じであったろう。商船は波風の影響をほとんど受けず安定した航行を続けていた。

商船の速度は十ノットであったが、我々は一戦速十二ノットを出さねばついてゆけなかった。無事青島沖まで送り、舟山列島へ引き返したのである。

黄海や朝鮮南方海域へ哨海を移した。黄海を哨海しているとき、潜水艦らしきものを探知した。目標が移動したり、スクリー音まで捕まえたようので敵の潜水艦には間違いなかったようだった。追尾し方向を定め全速力で突っ走り爆雷を投射した。投射終了後、反転して効果の確認を行ったが、爆雷で海の中が荒れていて映像が映らず確認には至らなかった。撃沈は間違いなかったろうと思われた。あとには幅四百メートル、長さ千メートルの帯状の海面に夥しい数の魚が浮いた。ポートを降ろしすくい上げたが、短時間に大樽二杯ぐらいの収穫があったようだった。

濟州島と半島との中間付近に秋子島という島があった。確か三つの島からなり大きな内湾を抱いていたの

ではなかったか。入り口は狭かった。一晩中哨戒航行を行い湾に入ったのは朝七時か八時頃ではなかったろうか。湾に入ったのはこの時の一回だけだった。外海はしけていて風波はかなり高かったが湾内はまるで嘘のように静かであった。外に海防艦が一隻、我が艦より先にやや湾口寄りに錨を入れていたのがいた。朝食後ゆっくりとした気分トイレに入っていた。突然「配置につけ！」の命令が発せられ艦内が騒々しくなった。すくと立ち上がった。もう一つのトイレから、すくと立ち上がった人がいた。二人は顔をつき合わせた。矢野艦長だった。

「何だろうかね」「何でしようかね」と二人は艦橋に駆け上がった。当直将校は渡辺機雷長だった。指さす方を見るとアメリカの飛行艇が湾口の方からこちらの方へ高度を下げながら近づいて来るのが見えた。艦長は「まだ撃つな、まだ撃つな、出来るだけ引き付けよ」と一発必中の機会を待ち続けた。飛行艇は我々には気付かず着水するつもりであったろう。あともう少し引き付けねばと思っていると、もう一隻の海防艦が

射撃してしまった。弾は外れた。飛行艇は驚いたように飛び去ってしまった。「あの馬鹿が」と口惜しくてしようがなかった。

あるよく晴れた日の真昼時、南岸から真南のコースで済州島に向け航行していた。済州島の見事な山を眺めていると島の上空あたり三機ばかりの敵の飛行機が現れた。高く飛んだまま島近くの海中にばらばらと落とした。投下機雷であったろう。機雷投下の現場を見たのはこの時だけだった。ただちに打電し機雷の位置を報告した。

何日のことかはっきりは覚えていないが、特緊電で「我一千機と交戦中」を受信した。戦艦「大和」からの発信だった。常識では考えられぬ数だったので、一桁違うのではなからうかと話し合ったが、後で知った情報で間違いでないことが分かった。「大和」の最後はこの海域哨戒中の出来事だった。

四月の下旬、この海域を離れ北海道へ向かうことになった。北洋作戦参加のためである。この頃、艦内で

はバラチフス患者が多発した。途中舞鶴の海軍病院へ入院させることになっていた。「海五十五号」は最後の寄港地として、ちょっと「尉山」に立ち寄り内地に向かった。真っ暗の中、尉山を出港したが直後、私は高熱を発し寝込んでしまった。同じ疑いで約二十人ぐらいの人達と一緒に舞鶴病院に入院したのである。

退院したのは五月二十日頃であったろう。退院後は小樽へ来るよう艦長の指示があったので陸路小樽へ向かった。小樽では武官府の指示により軍指定の旅館で「海五十五号」の帰港を待った。六月の末か、七月の初め艦は千島の占守島から帰って来た。大変苦勞の多い航海のようであった。

七月十四日の夕刻から二、三人で上陸し、指定旅館に行った。九時過ぎか十時頃ではなかったろうか、艦長が呼んでいるとのことで部屋に行った。司令と二人で上陸しておられた。今届いたと電報を手に入れた。文意は「敵機動部隊が北上接近している。明日空襲の公算大なり。各艦は商船数隻を連れ、山かげに退避するか、日本海へ遠く退避せよ」とのことだった。

司令艦長は協議のうえ前者を採ることになった。ただちに帰艦した。

翌朝は密雲が垂れ込めていた。九時ごろではなかったろうか。密雲の上を轟音をたてながら大編隊が北の方へ向かっているのが分かった。しばらくして次の編隊が飛んで行った。目的地は北の方ではないかとさえ思えたが、しばらくたって海面すれすれの低空で現われて来た。各艦船からは一斉に応戦し、激しい戦闘が始まった。商船には大きな被害を受けたのもあったが、「海五十五号」には被害はなかったと思っ

ている。編隊が去ったあと、沖の方で三機旋回しているのが見えた。この頃は雲は薄く、高くなっていて遠くのものが見えるようになっていた。重要人物かあるいは重要な物が浮いているのではないかと捕獲に動した。旋回中の一機の近くで大砲の弾が一発破裂した。敵機はあわてたように水平線の向こうに飛び去って行った。我々は追い払ったと思ったが、それも束の間、やがて三機とも舞い戻ってきて攻撃してきた。

一機目二機目の弾は外れたが、三機目の攻撃がまた

もに当たり大きな被害を受けた。公式記録には「船体損傷、戦死九人」とだけ記してあるそうである。負傷者のことには触れていないようであるが、病院に収容された人は準士官以上六、七人、下士官、兵、二十数人ではなかったろうか。小樽の陸軍病院だったことと、終戦間近かだったことで連絡がうまくゆかなかつたのではないだろうか。

的場新艦長が病院に來られた。矢野艦長に着任の挨拶をされたあと、私は急に出動することになった。艦に戻れないかと言われた。弾片摘出手術をつい先日したばかりであったが、両肩を支えられながら一緒に戻った。新先任将校（航海長）も着任していた。

任務は南へ向かっている商船二隻を護衛し、僚艦一隻と共に函館沖まで送り届けることだった。この頃は日本海にも潜水艦が入り込み、日本海も安全海域ではなかった。夜間に潜水艦を探知し、艦内が騒々しくなった。病床に伏していたが艦橋へ上がって行った。手すりにすがりながらたどたどしい上り方で間もなく

艦橋という頃、岸の方で一発、続いて一発と大きな爆発音がした。海は光り輝いていて、一番艦との間を白泡の帯を引きずりながら猛烈な勢いで突き進んで行くのがはっきり見えたという。

大湊に着いた。この工廠で今まで出来なかつた修理を行った。工廠の岸壁に一週間ばかり横付けしていただろうか、再び機動部隊が近づき空襲がありそうだと言う。早朝に岸壁を離れ港外に投錨した。九時から十時だったろうか、戦闘が始まった。在泊艦船の数も多く、方々から応戦した。交戦中に沖合で撃ち落とされたのがいたのであろう。上空で二、三機旋回しているのが見えた。そのうちに小型水上機が一機飛来して旋回に加わりやがて着水した。砲弾が方々から飛び近くで水柱が立っていた。水上機は飛び立とうと滑水したが飛び立てなかった。二度三度試みたがついに飛び立てなかった。旋回していた飛行機も姿を消した。

だいたいぶたつてから「見張りの報告によれば搭乗員二人が浮舟に乗り陸地に向かっている。捕獲に出動せよ」との司令部よりの命令がきた。尋問官が乗り込ん

で来た。ひげを生した大尉だった。空襲の谷間に出勤した。現場には搭乗員、浮舟共になく飛行機だけが浮いていた。引いて帰ることになり応急員が水に入りロープを掛けた。

艦が動き出した。ロープが切れた。再び掛けようとした。その時ラジオで大畑の飛行場が空襲を受けていることを報じた。直ちに応急員を引き上げ元の所へ急行した。元の所には商船が数隻集まり錨を下ろしていたので奥に向かい投錨した。錨を入れた途端に二、三機急降下して来たが、弾はすべてわずかずつ外れた。商船のいるところは猛烈な襲撃を受けていた。元の所にいたら大きな被害を受けたかもしれない。機雷長の話で爆雷に弾が当たっていたとのことで、一緒に行っ て見た。後甲板に出してある爆雷に機銃弾での穴が一つあいていた。なぜ爆発しなかったか分からなかったが、爆発していたら大変なことになっていただろう。夕刻、再び飛行機を引きに行った。ロープを掛けている時に飛行機が向かって来た。射撃態勢をとったが日本の飛行機であった。曳航後、工廠側の岸壁に繋

ぎ、再び外に出た。

翌日また敵機が攻撃に来た。飛行機を見て腹がたつたのか、繋いであった付近を集中的に攻撃し引き揚げた。

稚内へ向かった。北洋向け船団の護衛であった。商船が集まらず順延順延で港内に碇泊していた。沖合には旧型戦艦の「常盤」と大型商船一隻が機雷敷設艦に改造され碇泊していた。また護衛のためであろう駆逐艦がいた。聞くと旧型駆逐艦「松島」だということであった。これに敵機が攻撃してきた。敷設艦からは空襲の合同間におびたらしい機雷を放出した。誘爆防止のためだろう。大きな被害を受けたようだった。

八月十四日、各艦長は作戦打ち合わせのため、司令の元へ召集された。帰って来た艦長の話では作戦の打ち合わせは何もなかった。明日また行くと言っていた。また何かおかしいぞとも言っていた。翌日艦長は再び司令の元に行き各艦長と共に玉音放送を聞いたことを発表した。

戦争は終わった。でも我々の行動は終わったわけではなかった。翌々日くらいではなかったか、樺太の邦人引き揚げの輸送を命じられた。最初は大泊へ行った。到着した時にちょうど輸送艦が先に来ていて収容を終え出発するところであった。棧橋には人影一人見えなかった。「海五十五号」はそのまま稚内へ引き返した。

さらに、一、二日後だったろう、日本海側の本島へ行くことになった。商船一隻が同行した。濃い霧の中で離れ離れになり、それぞれ独自に進んだ。夜中の三時頃だったろうか。艦長がそろそろ岸に向けてみようかと九十度くらい右へ変針した。浅くなった所で投錨し床に就いた。翌日霧が晴れてみると、奇しくも港間近に止まっていた。さらに驚いたことに、千々五百メートル離れた北の方に商船が投錨していた。何も見えない濃い霧の中の航行で全く奇跡と言うほかはない。

ようやく収容し港を出たのは薄暗くなってからであつた。現地の人々は我々のために鶏や山羊までくれ

た人達もあつた。翌日午後の二時か三時頃に稚内へ着いたのではなかったらうか。

舞鶴へ向かった。海防艦七、八隻で編隊を組み航行した。舞鶴が近くなつた頃、各艦申し合わせ右へ一斉回頭を行い、爆雷二、三個を投下した。水深は二〇〇メートルくらいあつたのではないか。「海五十五号」の獲物はイワシ数匹だったような気がする。成果を連絡し合つたが、各艦とも似たようなものだった。

舞鶴港へ差しかかった。左側崖下の浅瀬に座礁した船があつた。甲板から上は人が鈴なり状態でものしり叫ぶように騒いでいた。ものの十分ほどのうちに座礁した船は「海五十五号」の二、三隻前に入港した船だとか、二十分ぐらい前に入った船で米軍投下の機雷に触れたとかの噂が広がった。どこから入つた情報か知らないが、得てしてこの種の噂は当たっていることが多かった。噂の通りとすれば、まかり間違えば我が艦もまた触雷の危険があつたことになる。

戦後、日韓の間で問題になつた船ではなかつただろ

うか。港では繫留した軍艦はすべて砲身を下に向け、空にはアメリカの飛行機が悠々と飛んでいた。情けなかった。戦いに負けたことが実感として感じられてきた。九月一日付にて復員した。

十月ではなかったか、旧艦船乗組員は海外残留邦人引揚輸送のため船に戻れということで舞鶴へ戻った。大砲、機銃は取り外され、かつての威容はなく見るかげもない姿になっていた。佐世保に回航し隊を編成した。海防艦ばかり七隻だったと思う。フィリピンに向かった。鹿児島沖から種子島の東を通り南下した。こうこうと明かりをつけた艦は美しかった。戦争中灯火管制下での編隊航行に苦勞した身には、明かりをつけた編隊の夜間航海はこんなにも楽なものかと思つた。四隻は途中で別れてマニラに行き、「海五十五号」を含む残りはダバオへ行つた。

ダバオで邦人を收容した。ほとんどが老人、婦女子で日本語がたどたどしい人達が多かった。帰る途中、「海五十五号」は別れてレイテ湾奥のタクロパンに寄

り、ここでまた邦人を收容した。日本へ帰る途中で台風に遭い、転覆するのではないかと思われるくらい大きく揺れたり、ビシビシと船体が音を立て、分解するのではないかと心配した艦長が艦橋に上がって来たこともあった。また、引揚者の中から死者が二人出て水葬をしたりしたこともあった。鹿児島島の加治木へ上陸させた。十二月の初めであった。鹿児島から呉へ回航し、私は呉で退艦し「海五十五号」と別れたのである。

昭和二十二年二月頃ではなかったかと思う。「海五十五号」ほか数隻の海防艦が編隊で航行しているのを新聞の写真で見た。周防灘か響灘かを西日に向かつて進んでいる写真だった。

英国、オランダ、中国等へ戦利品として引き渡されたの航行だった。懐かしさもさることながら、逆光でシルエットのようなの写真は、妙に寂しく感じた。

飼い主から引き離され、悲しげに連れ行かれる犬の姿を連想した。哀れさが先に立ち、落ち込んだことを思

い出している。装備も元に戻され、異国で再度の務めをしたのであろうが、戦後もやがて五十余年、もはやこの世には無いのではなからうか。